

杜の都仙台 プロ野球の変遷 ～ロッテオリオンズから楽天イーグルスまでの歴史～



日本水工設計株式会社／東北支社 沼尻 治

私が生まれ育った東北地方最大の都市・仙台市。

この地に新球団、東北楽天ゴールデンイーグルスが根を降ろしたのは2005年のこと。本拠地球場をフルキャストスタジアム宮城とし、現在その名称は楽天Koboスタジアム宮城となっている。

球場としての歴史は古く、大日本帝国陸軍練兵場の跡地を造成し、戦後占領期の1950年（昭和25年）5月に開業した。これはパシフィック・リーグの本拠地としては最古で、セントラル・リーグを含めても阪神甲子園球場、明治神宮野球場に次いで3番目に古い球場である。

同月27日の竣工を前にこけら落としとして同月5日、パシフィック・リーグ公式戦・毎日オリオンズ対南海ホークス、毎日オリオンズ対大映スターズの変則ダブルヘッダーが組まれた。前売券約3万枚が前日までに売り切れ、混乱が予想されて

いた。[要出典] 前夜から観衆が続々と詰め掛け（午前2時頃にはすでに数千人がいた）、朝には群衆がもみ合う状況となった。このため主催者は開場予定（午前10時）を繰り上げ、午前8時から入場させ始めた。すると観衆が入口のトンネルで転倒し、将棋倒しとなって3名が死亡した。さらに入口からあふれた観衆は1塁側スタンド側のフェンスを越えての入場を試み、高さ2mのフェンスをつかんでぶら下がったことで約80mにわたってフェンスが倒壊、地面に転落した観衆から重傷者12名、軽傷者19名が発生した。

1973年（昭和48年）5月22日、河北新報社を中心とする宮城県内の有力企業・団体が参画して発足した東北野球企業の資金援助により、プロ野球公式戦のナイター開催に対応する照度を確保可能な鉄塔6基の照明設備と一部電光式のスコアボードが完成。これは東北地方では初の設備だった。



写真－1 昭和40年代の宮城球場

ところで、楽天が仙台に来る28年も前に、この球場を本拠地とした球団があった。

それが現在の千葉ロッテ・マリーンズ、当時のロッテ・オリオンズである。当時の呼称は宮城球場だった。県営宮城球場と表記されたこともあり、つまり宮城県が運営する球場である。

ロッテ・オリオンズが宮城球場を本拠地としたのは1973年から。ただし、この時はまだ準本拠地扱いだった。

前年までロッテは南千住にあった東京スタジアムを本拠地としていた。

「光の球場」と呼ばれ、メジャーリーグの球場のように内外野総天然芝の美しい東京スタジアムは、かつてオリオンズを所有していた映画会社の大映が1962年に建設した球場だった。完成当時のチーム名は大毎オリオンズ、1964年からは都市名を冠に付けた東京オリオンズとなった。しかし、球団経営に行き詰まり、菓子メーカーのロッテに命名権を売却、チーム名はロッテ・オリオンズとなり、そして1971年、正式にオリオンズをロッテに経営譲渡したのである。この時、東京スタジアムの経営権についてロッテ側に球場の買い取りを求めたがロッテはこれを拒否。買い手がつかなくなった東京スタジアムは取り壊しせざるを得なくなった。球場建設から僅か10年、「光の球場」と謳われた東京スタジアムは一瞬の輝きだけ放つ

て、その幕を寂しく閉じた。

本拠地球場を失ったロッテは、保護地域をそのまま東京都に置き、首都圏の球場の空き日程に主催試合を組み込む事としたがそれでも日程は半分以下しか埋まらず、残りの主催試合をどうするか頭を悩ませた。

そして宮城県がロッテを受け入れようとなった。

仙台市の県営宮城球場、プロ野球開催能力は充分にあり、ロッテ招聘に合わせてナイター照明も明るくなり、アクセス面でも便利な場所にあった。保護地域が東京のままだった為、宮城球場は準本拠地という扱いだったが、1973年（昭和48年）から宮城球場で多くのホームゲームを行なう事となった。そして翌年、1974年（昭和49年）からロッテは正式に宮城球場を本拠地球場にすると発表し、保護地域も宮城県に移管した。

宮城球場が暫定とはいえ正式な本拠地になっても、球団事務所や合宿所は東京にそのまま置き、選手たちも東京に住んでいて、本拠地で試合するのも実態はビジターのような遠征と同じ。ホームの宮城球場で試合をするときは遠征で、日本ハム・ファイターズとビジターの後楽園で試合する時には家から通うという奇妙な現象となった。



写真-2 現在のコボスタ宮城

本拠地球場となった年の秋の事。1974年（昭和49年）、パ・リーグ優勝を果たしたロッテは、読売ジャイアンツの9連覇を阻止したセ・リーグの覇者、中日ドラゴンズと日本シリーズを戦う事になった。ところがロッテは、本拠地球場の宮城球場ではなく後楽園球場を使用することとし、そしてこの年の日本シリーズで中日を4勝2敗で破って見事日本一に輝いた際の優勝パレードを東京で行ったのだ。仙台市民は大いに失望した。

1978年（昭和53年）、横浜スタジアムが完成し、川崎球場を本拠地としていた大洋ホエールズ（現・横浜DeNAベイスターズ）がそちらに移転を発表すると、ロッテ球団は保護地域を神奈川県に移して、空いた川崎球場を本拠地として使用する事になった。仙台市民も、多少の移転反対運動はあったものの余り熱を帯びず、移転に大した障害とはならなかった。

ロッテが去った後の宮城球場は、年に数回のプロ野球開催があるだけで、それ以外では地元のアマチュア野球の常打ち球場として使用されていた。以降、球場施設全体の老朽化が顕著に現れる事と成り、次第にプロ野球の開催試合数も右肩下がりの状態に成り掛けていた。

しかし宮城球場の運命を一変させる出来事が、ロッテが去った27年後に起こった。

2004年（平成16年）、オリックス・ブルーウェーブと大阪近鉄バファローズの合併に伴い、日本野球機構が選手会側の要望により1チームの新規参入を認めることになり、ライブドアと楽天がNPBに加盟を申請。双方とも宮城県を保護地域とし、宮城球場を改修した上で本拠地として使用す

る旨を発表した。審査の結果、11月に東北楽天ゴールデンイーグルスの新規加入が決定した。

本来であれば管理者である宮城県側が球場を改修の責務があった。しかし県側からは「財政上の事情等もあり、拠出は出来ない」との回答だった。結局、楽天球団側が全額負担で球場改修する事で折り合いが付き、同年11月に大急ぎで改修工事が行われ、不眠不休での改修工事を経て、翌年2005年（平成17年）の開幕時には見違えるような球場に生まれ変わっていた。宮城球場はその都度シーズン毎に、小まめに球場の改修を進めてきた。

このような歴史を辿りながらロッテオリオンズ本拠地からちょうど40年後の2013年（平成25年）、本当の意味での仙台本拠地、楽天イーグルスが日本一の胴上げを遂げた。

楽天球団は「地域密着型活動」「東北ろっけん活動」を中心に、東北の人口約900万人の楽天ファン巻き込みを狙っている。

JR宮城野原駅（コボスタまでの最寄り駅）を降りた瞬間、目に飛び込んでくるのはホームの壁に描かれたマスコットのクラッチーナ。駅コンコースや出入口には、壁一面にチームカラーであるクリムゾンレッドとチームロゴ。耳には、楽天球団歌の「羽ばたけ楽天イーグルス」が発車メロディとなって聞こえてくる。楽天イーグルスの世界に引き込まれる、魔術のようである。

ロッテオリオンズ選手 村田兆治、有藤道世、レオン・リー、弘田澄男、山崎裕之……。この選手名に懐かしさを感じたら我が年代ですか（笑）

東京から新幹線で最短1時間30分、ぜひ仙台にお越し下さい。